

「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

鷗外に献杯オクトーバーフェスト 高橋 章子

欧州在住の作者の初めての投句。(ドイツ語に会津訛りの芋煮会)〈国境に毛布を配る人の波〉〈望郷は冬の帽子に隠しをり〉など、どの句も焦点が明確で破綻がない。「オクトーバーフェスト」は、ドイツはミュンヘンの賑やかなビール祭。森鷗外は22歳のとき明治17年からドイツに留学し本場のビールを味わい、愛し、このフェストにも出向いて人々と語り合ったそうで、そのことを前提にこの句は詠まれている。鷗外に敬意を表しての「献杯」。この献杯は実際の献杯だろう、作者も杯ならぬジョッキを持って鷗外を偲んでいる。

カザルスの「鳥の歌」聴く敗戦日 高橋満利子

スペイン出身でチェロの名手パブロ・カザルスが平和を祈り演奏した『鳥の歌』。カザルスは終生、反ファシズムの立場を貫き、核実験にも反対。94歳のときにニューヨーク国連本部にて「私の生まれ故郷カタルーニャの鳥は、ピース、ピースと鳴くのです」と語り『鳥の歌』を演奏したエピソードは有名だ。「敗戦日」に共鳴した。

糸瓜忌や寢覚の水を一息に 高橋美智子

逝ったその日まで十年という歳月を病床で過した子規。(病牀やおもちや併べて冬籠 子規)。その生涯を偲んだ一句である。目覚めの水を一息に飲むことができるのは健常の人。作者も一息に飲み、そのときにふと子規のことを思ったのだろうか。水は水でも子規には通常の水のほか「糸瓜の水」も時に必要だった。

夜泣きせず寝付くみどりご良夜かな 竹森 美喜

あやせば直ぐ眠りに入り、夜泣きを一度もしないで朝までぐっすり眠ってくれる幼子。親にとつてこれほど安堵できる夜はないだろう。良夜は十五夜、十三夜などの月の明るく美しい夜。その良夜と「みどりご」の取合せはまことに目出度い。

天高しタオル干すにも色に順 田中 京

ハンガーにタオルを干すときの順番。大抵はタオルの厚さや大きさに決めるのだが、作者のお宅ではいろいろのタオルをお使いのようで、この句では赤、白、黄、緑などの色に順番を決めて干しているという。見栄えもして、毎日の気分転換にいいかもしれない。清潔感に溢れている一句。「天高し」が効いている。

白桃剥く百鬼夜行の暗がりに 寺田 幸子

京都東山の高台寺で百鬼夜行絵巻を見たことがある。赤い舌をべろつと出した絵の提灯も外に掛けてあり頗る不気味だった。この句の「百鬼夜行の暗がり」もまた不気味で、真夜中に松明をたくさん持った鬼、それも一つ目、三つ目、一本角などの奇体な鬼共が来る。一方作者は不思議なことに何故か、そのとき外の暗がりで白桃を剥いている。百鬼も怖いがこの白桃も…怖い…なあ。

月今宵唇吐いて出るありがたう 長井 敦子

「ありがたう」。十五夜を待ちに待って月を仰いだ時にくちをつけて出て来た美しい言葉。月への感謝でもあろうし、一緒に眺めたこともあった今は亡きご両親への感謝の言葉でもある。「唇吐いて出る」に深い真心が感じられる。

星霜や鯨釣りし子は樹木医に 中嶋きよし

あの頃一緒に鯨釣りで遊んでいた子が、大きくなって今では立派な樹木医になっている。それを「星霜や」の詠嘆で語っている句。あの子が樹木医に？ 良かったなあと、率直に安堵している作者の顔が見える。「星霜」は同じく鯨釣りしていた作者の長い人生をも指すが、そういう解釈は作者の意図とするところではないだろう。

戸を鳴らす風のひと日や秋彼岸 中村 敬子

この句から、寺山修司の〈戸を叩くのは、誰 開けてみると 誰もいない 淋しい雨が 降っている 気のせいだったのね〉という詩を思い出した。叩くと鳴らすとは意味は異なるが「秋彼岸」という季語が置かれてみると、戸を鳴らしたのは風だけでなく、作者の敬愛してきた身内の誰彼なのかもしれないと思えてくる。

同い齡の東京タワー月見豆 中村 東子

年齢を敢えて明かしてまで東京タワーを詠む。十三夜の後の月。茹でた枝豆を供えるので豆名月という。その枝豆を月見豆といつて愛でてきた伝統文化の中に作者も確り身を置き、今は遠くに在って観ることも叶わぬ同い齡の東京タワーと名月を祝う。同い齡同士の饗宴である。

願はくば則天去私よ蟬時雨 中村 幹子

「則天去私」は夏目漱石の最晩年の言葉という。広辞苑には「小さな我を去って自然にゆだねて生きること」とある。無心を尊んだ漱石。作者は「願はくば」とこの漱石の心境に憧れているがそれは恐らく蟬時雨の激しい声に深く感じ入ったからだろう。晩年の漱石が鷗外に宛てた「恭賀新年 夏目金之助 一月一日」という極めて簡素な賀状を見たことがある。斯う謙虚でありたい。

負ふ餅もパンに代りて歩き初め 野沢 慶子

「這えば立て立てば歩めの親心」を満足させるために
行う、その子の人生の通過儀礼。最近はずっとにその手
順や用意するものなどが詳細に書かれていて若い夫婦は
親よりもこのネットから情報を得て、餅もまたネットで
調達して儀式を執り行う。この句ではもつと進化し、背
に負わせる餅を「パン」で代行させている。現代らしい
光景だ。尤も、この餅は「歯固め」という平安時代より
の正月の行事に欠かせぬもの。齢という字は、人は歯を
もつて命とするので歯の字を当てているというから、パ
ンで代行できるものかどうか。えっ？ フランスパン？
現代を活写した一句。

登高の極まれば宇宙ステーション 橋本 恭子

登高は「高きに登る」。古くからの中国の行事で、重
陽の日、赤い囊にはじかみを入れて菊酒に浸し、高い山
に登って飲めば、災厄を祓うという伝えがある。故にこ
の掲出句の宇宙ステーションには何が何でも菊の酒が登
場しなければ可笑しいのであつて、登つたからには宇宙
ステーションから月見の酒を味わつて欲しい。この句、
宇宙ステーションが人類の究極の登高だというのは少し
無理もあるが面白い発想。

晩夏光酒田港の暮れなむと 長谷川菊男

酒田は夕日の美しい港。長い坂道を登り芭蕉像の立つ
日和山公園に行けば酒田の港とその夕日を拝むことがで
きる。夏の終りの日射しが夕日へと移ろい水平線を赤く
染めてゆく。ここを訪う者は夕日の沈むその最後の赤い
一滴まで絶対見逃さない。「暮れなむと」の時間が貴重。

泣き顔もへのへのもへじ捨案山子 原田ミチ子

案山子は田の神で、稲刈や農事のすべてが済めばまた
山の神となつて山へ戻るとされている。その案山子への
感謝の祭もあり、関東では「十日夜」の行事がある。関
西では「亥の子」の行事。例えば信濃の安曇野地方では
案山子揚あひといつて家の庭に案山子を招き大根や餅などを
お供えして祝う。掲出句の捨案山子は案山子を粗末に
扱つていゝのではなく、田じまいのあと放つておかれて
いる案山子を指すのだろう。「へのへのへのもへじ」の愛嬌
ある顔がもの哀しい。

陽がぢりぢり一番乗り案山子翁 浜田 優子

これはまた元氣な案山子翁だ。村での第一号の案山子
だが、立たされたのが午後の最も暑い時。でも、一番乗
りはいいが陽がぢりぢり照るし困つたなあ、なんて顔は
一切せずに好々爺を演ずる翁。踏ん張りどころである。

鶏頭直立仏飯は涸びゆく 春田 千歳

時代劇でいえば『木枯し紋次郎』のような映像美を感じる。仏飯と故人、そして鶏頭花。「鶏頭直立」より「仏飯は」までは七・五の句跨りで「けいとうちよくりつぶっぱんは」と通常のリズムを壊し一句に活を入れている。茶碗に盛った仏飯の涸びから身寄りのない故人が想像でき、直立した赤い鶏頭が怒りながらそれを悼んでいる。乾いた抒情とでも言おうか、巧みな構成の句。

敬老日腕立て十回増やしけり 平野 豊雄

元気な高齢者。腕立て伏せの体操を日常的に実施しているだけでも大変なのに、それを十回増やしたという。つまり、それまで十回していたら計二十回。五十回していたら計六十回。敬老の日だから特別だとは言え、凄い偉業だ。

歪なる形も許され榎植成る 福井 芳野

榎植の実の歪な形は、特徴的なだけに、すでに多くの俳人により詠まれている。しかしこの句は、視点が個人的で、榎植だけがその歪みを許されていると詠む。それはつまり、榎植以外の人間、或いは作者自身には歪んだ形が許されないということ。歪なる愛、などは論外であり、以ての外ということになる。意表を突いた佳句。

待宵の中華コースのどんどん来 本多 遊子

十五夜を明日に控えた夜の中華街と思つてみる。フカヒレや燕の巢を含む一万五千円のコース。前菜からどんどん出てきて円卓はもう賑やか。少し温かくした紹興酒に酔い、取り分け皿が三つ五つと嗚呼食べきれない、止まらない。明日は明日、今日は今日。前夜祭で盛り上げ明日の名月を占う。何かとてもハッピーな一句。

あまねく死は穩やかであり衣被 松本 余一

正岡子規の「死後」という最晩年の隨筆がある。自分がすでに死んでいるという仮想の下に、その葬られ方にいちいち注文をつけ、土葬、火葬、水葬、娑捨、ミイラと考えを巡らす。最後は小さい早桶の中であまり窮屈ではない葬られ方に安堵する。そういうことを考えているうちに「今までの煩悶は痕もなく消えてしまうてすがすがしいええ心持になつてしようた」と子規は語る。この松本さんの句とは関係のない話を引用してしまつたが、衣被の皮がすぽつと抜けるように、死は穩やかでありたいものと、ぼくも思う。

お月見泥棒とて気がつけば何も彼も 水谷 光子

お月見の時に村の子ども達が各家を回り、お供え物の餅やら菓子やらをねだつたり失敬したりする風習がある。

集団で来るので応対しているうちにどんどんお供え物が「何も彼も」消えてゆく。地方によつては、こういう風習は月見以外の民間行事にもあるかもしれない。記録されず記憶にのみ残る出来事が、俳句により記録された。

たうきびを齧るハモニカ吹くやうに 持田きよえ

焼いた玉蜀黍をまるまる一本そのまま横にして齧る。その持ち方によつてハモニカになったり、小指などを少し浮かして持てば笛吹童子の横笛になったりと、重いけれどもなかなか便利な玉蜀黍である。「ハモニカ吹くやうに」が郷愁を誘う。

露草の雫一粒ゑのぐ溶く 森尻 禮子

可憐な露草に付く小さな雫。折しも、パレットにそのはかない小さな一粒も加えられ絵具が溶かれる。露草でなくても、芋の葉の雫や蓮の葉の雫で溶いてもよさそうだが、やはり露草のあの碧色に透けた雫で溶いてこそこの句は成り立つのだと思う。

逝く人の背追ひきれず秋の風 八尋 信子

お身内の死に際しての句という。どこまでも追いかけて行つても追いつけない。幽明境を異にし、後は秋風が吹くばかり。悲しいが今回の作品には「晴れやかに再起

ひたすら」の気丈な句も出されている。

澄む水の隆々速し笹分けて 山田 雅子

秋の澄んだ水がほとぼしつて流れる。その景がよく見える句だ。「隆々速し」はそれだけ読めば当り前の表現だが、その後が続く「笹分けて」の措辞により眼前の水の勢いというものがよく伝わってくる。こういう清々しい自然詠も貴重である。

手首まで差し入れ掬ふ今年米 横須賀智子

新米の美味しさはいろいろ詠まれているが、この句ではご飯を炊くのに米櫃の奥まで手を入れて新米の感触を楽しみつつ掬い、その美味しさを表現し成功している。「手首まで」がいいなあ。一句が起ち上がった。

一房の葡萄に種のある安堵 東 祥子

種なし葡萄が全盛で、種のある葡萄を買ってきてても人には不評という世の中。我が家でも食べてくれない。逆にシャインマスカットのように皮ごと食べられて美味しいものは笑顔をもって迎えられる。掲出句ではその種への愛着が詠み込まれていて好ましい。昔甲府駅で汽車の窓越しに籠ごと買った甲州葡萄。種はあったが気にもせず美味しく戴いたものだ。「安堵」は解かる気がする。

黒葡萄宇宙はあまたあると言ふ 伊澤やす系

粒の大きい黒葡萄の房。そしてその房がいっぱい生っている葡萄棚。葡萄一粒が星、一房が銀河であり島宇宙だとして、葡萄の宇宙は限りなく広い。黒葡萄からの発想なのだろうが「あまたある」はその通り。そうなる葡萄酒はさしずめ宇宙の雫であり、宇宙のとある酒場に寄ると白や赤、ロゼの色の雫を飲ませてくれるという。

生涯に読み返す本星月夜 石垣喜代子

確率論でいくと、本を後で読み返そうと思っても読める数は知れている。だとしたら、何を優先して読むか。掲出の句では、すでに余命ということが意識されていて、その上で「あと何冊読めるかな」と素朴な疑問を自身にぶつける。その心許ない気持が、美しい星月夜の光に映し出されている。

秋霖や魂にひびける本探す 市村 啓子

しとしと雨が降って気が詰まる毎日。作者のように、魂に響く本を探したいと思うことはあるだろう。魂に響くといっても『燃える闘魂』というのではなく、この句では琴線に触れるささやかな一書、作者の行方に刺激を与えてくれる一書であると思われる。

月光に痩せ病棟の消灯後 岩根 甲

入院の一日を終え、配膳・夕食を終え、スタッフの勤務の交代もあり病院は少しずつ静かに夜の体制を迎える。消灯になってそれまで窓越しに月見をしていた月の光が自分の顔を赤裸々に照らしていることを知った作者。闘病中とは言え、いくら痩せた体、顔を月光の下に見てしまった驚きと哀しみは如何ばかりか。「月光に痩せ」が切ない。

銀漢や水の匂ひの丸太椅子 牛込はる子

火星に隕石が衝突しその衝撃で地下から氷が出てきた。太陽系に水の匂ひが一斉に広がる。翻つてこの丸太椅子。水の匂ひがするというのが、椅子だけでなく、座っている作者からも水の匂ひがしているだろう。作者も遠い宇宙からやって来たのだ。見上げる銀漢は我が故郷である。

猛暑日の洗濯バサミ割れにけり 内海 範子

プラスチックの洗濯バサミは何年も使っていると老朽化でいとも容易く割れる。指の力の入れ具合も影響すると思われるが、この句のように熱い陽射しに長く晒されていると老朽は早く進むのだろう。それにしても洗濯バサミも俳句になるんだと、この句は、この作者は示してくれた。俳句は無限である。

今年また会へて良運赤蜻蛉 大下 壽櫻

へとどまればあたりにもゆるる蜻蛉かな 中村汀女。

竿の先に止まる赤蜻蛉に郷愁を覚える人は多い。作者も待ちに待つてやつと「今年また会へ」、それを「良運」と心から喜ぶ。澄んだ空に群れなして舞う赤蜻蛉の耀きを眺めると、この良運の意味がよく解かる。

食べかけてこつくりこくり祭の子 太田 裕子

「小若」と染め抜いた小さな袴纏を着、巾着袋をつけ白足袋履いて、鼻筋に一本白粉を塗られ、それが祭の子。神輿を担げれば担ぎ、担げねば山車を曳く。掲出句の子はまだ幼いのだろう、祭に出るだけで疲れてしまい、休憩中に何かを食べていながらこつくりこくりして、眠い。この「こつくりこくり」の表現が可愛い。

草原の素手にて捕ふ秋茜 小河原政子

「草原」「素手」と具象を揃え、「捕ふ」で動きを見せている。景が明瞭。「素手にて捕ふ」が赤蜻蛉への親しさを示していて好ましい。何の作爲もなく気持の良い句。

うるこ雲大魚になるかと仰ぎをり 金子かほる

晴れた秋空はキャンバスだ。自由奔放にいろいろな雲が芸術的な綾をなす。一方で、鯛雲、鱗雲といった特徴

のある雲が空一面を覆い、進み、これも壮大な景色で我々の目を楽しませてくれる。作者も鱗雲の流れて行くのを見ながら、その鱗を持つ魚が今に大魚になるのではないかなどと突飛な発想をして自ら愉しんでいる。秋深し。

米兵に集まる村の風つ児 金子 学

今回の作品には〈死せし妹背に少国民蟬の中〉(二学期も弁当なしの父亡し児)〈殴る蹴るの復員教師四月かな〉など日本の敗戦に纏わる句が散見される。掲出の句もその一つ。ドラマなどでよく見かける場面ながら「風つ児」が頗るリアルで身につまされた。そして今を生きる作者の来し方を想った。俳句は記録文学でもある。

圓朝祭羽織り脱ぎ捨て汗飛ばし 金田 知子

毎年八月十一日の暑い最中に谷中の全生庵で圓朝忌が営まれ、大勢の落語家が集まる。名人といわれた三遊亭圓朝の供養である。この句はその当日の実況放送みたいで面白い。ところで「汗飛ばし」。これは実際に汗が飛んだのだろうが、へからだに汗をかいても、顔に汗をかかないようにするというのが、昔の芸人のたしなみでもあり、また、それが修業でもあった(安藤鶴夫『寄席はるあき』)ことを考えると、この落語家がまだ若手であることが判る。これからが楽しみである。

箒草トトロ口の如くカットセリ 金田 喜子

箒草のふつくらした形。秋になると紅葉しとても綺麗である。それを「トトロの如くカットセリ」。想像すると面白くて思わず吹き出してしまった。このような夢のある句、嫌味のない句、計らいのない句は、出来そうだが本当は作るのが難しい。童心が必要。

畑肥やす移住カップル初紅葉 菊地 孝枝

この「移住カップル」は比較的若いご夫婦なのだろう。農村移住を希望し地方の市町村の相談会に大勢の方が行くけれども、実際に移住するのはその一％程しかないというから、この畑肥やすカップルの本気度は高いと思われる。「初紅葉」——二人にとつても初めての紅葉。

目覚めけり秋冷わたる脹ら脛 北 好夫

〈紫陽花に秋冷いたる信濃かな 杉田久女〉の「秋冷いたる信濃」に対して「秋冷わたる脹ら脛」の諧謔。作者は久女の句と関わりなく句作していて、この句では自身の皮膚感覚をそのまま正直に詠んでいる。秋冷は秋になつて覚える冷気をいい、それを脹ら脛に感じたのだ。

秋雨は心に降ると仏詩人 久保田勝一

「秋雨は心に降る」なんて一回言つてみたいもの。詩

に疎いのでこの仏詩人がどなたなのか知る由もない。ヴェルレーヌに「巷に雨の降るごとくわが心にも涙降る」の詩があるが、或いはこの詩のことを作者は詠んでいるのだろうか。或いは別の詩人なのだろうか。何れにせよそんな引用を定型にうまく纏めていて心に残った。

師の墓に詣ぶりんだう咲いてをり 栗原 季星

俳人として秩父で永く活躍された故大野ひろし氏の墓参に出掛けた折の句だろう。「詣づ」で一旦切つたのがいい。次の「咲いてをり」の竜胆が印象深く残り、作者の心の弾みが伝わる。竜胆の花がなんとも美しい。

蝸の海に囲まれ立ち尽くす 小塰あゆみ

この句は蟬時雨のような激しい声ではなく、蝸の哀しみを帯びた声に囲まれた時の心境を語る。「蝸の声」でなく「蝸の海」がとてもない。蝸は広く深く心に沁みるように鳴くからである。したがって「立ち尽くす」に全く違和感がない。ちよつとした工夫で佳句となつた。

鹿の子百合ごぎげんやうと咲きにけり 小泉まり子

鹿の子百合が「ごぎげんやう」といたく元氣だ。御機嫌ようというと、いわゆるお嬢様学校を想う。「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」その全てが「ご

きげんよう」の一言で済むというから、これは鹿の子百合にとつても便利である。明るく奔放な句を戴いた。

台風上陸吹つ飛びさつなりポーター 幸喜美恵子

取材の最前線に行かされるリポーターは正確に取材でき、短時間で的確に発信できる人がベスト。また台風の上陸中でも決して臆しない人。とは言え、ずぶ濡れは可哀想だ。この句の如く今にも吹つ飛びそうな瘦せたりポーターも気の毒である。笑うに笑えない一句。

木犀の香りにひたる赤信号 小濱けえ子

木犀の良い香りに浸りながら信号待ちしているということだけの句だが、赤信号が効いている。赤信号は思いのほか長いため、青信号に替わるまでの時間を持て余すことが多い。偶然に信号機あたりまで漂ってきた木犀の香は有難かつただろう。ラッキーなひと時を得た。

身をのせて手繰る釣瓶や乱れ萩 小林ゆきお

井戸の水を汲み上げている姿がよく見える句。「身をのせて」が凝っている。そして井戸の辺りに咲く「乱れ萩」。へいちはやく萩は乱るる風を得つ 大野林火」に見る如く、乱れ萩には風がつきもの。そう、この句には風が流れている。その動きを読み落としてはならないと思う。

鳥渡るいくさの民に翼なく 小林 玲

『翼をください』の唄が聞こえてきそうだ。いつの世も、戦で死ぬのは名も無い兵士と一般の民。鳥の翼があれば戦地から脱げ出ること出来ようがそれは叶わぬ。「鳥渡る」の季語から現代の戦を見つめた一句。

椿の実意志の固さに疲れ見え 斉藤久美子

椿の実の硬さから「意志の固さ」に発想が及んだ句。座五の「疲れ見え」は写真の目が生きています。椿の実は本当に艶々して照っているけれど、時間の経緯とともに表面に疲れが目立つてくるので、「意志の固さ」は巧い。

受付に置く鈴虫の競ひ鳴き 佐藤 和子

何処か事務所、市役所、または医院。鈴虫の籠が受付台に置かれているという設定が先ず楽しい。順番を待ちながら、競い合つて鳴く鈴虫たちに作者は心安らいだことだろう。鈴虫は人気があつて直ぐに完売する。売られて何処に行つたかと思つたら、受付で鳴っていたのだ。

夏負けの気を引き立てむギター弾く 島 昌子

猛暑日の続いた暑い夏だった。冷房を適切に使用してきたが、どうやら夏負けしたらしい作者。負けてはおられぬと自分の気持を引き締めて、何とギターを弾いた。

悲しい曲でなく、自分を奮い立たせるリズムカルな曲と察するが、夏負けは収まっただろうか。

国葬や重し軽しと藪を掘る 清水 悠太

今年の九月は英国と日本でそれぞれ国葬の儀が執り行われた。それが「国葬や」。その慌ただしい葬儀とは全く関わりなく庶民は畑に繰り出し藪掘りをしている。それも「これは軽いな」「これは重くて、でつかいぞ」などと言いながらと楽しんで藪を掘っている。その対比で何を語りたのか、深読みをすれば如何様にも読むことができるが、藪掘りの様子を先ずは愉しみたい。

秋蟬のきれいさつぱり鳴き尽くす 首藤 久枝

今回の作品には別に〈秋の蟬天の階昇りたる〉がありこの句も诗情があつて素敵だが、同じ秋の蟬でも掲出の作品の方がそれらしい感じがあり、こちらを戴いた。「きれいさつぱり鳴き尽くす」が今の作者の気持に添っていると感じたからである。自分の身体を一度抜けてきた言葉だと感じたからである。

木の実踏みゆけば頭に木の実落つ 新海あぐり

こつんと頭に落ちてきたのは木の実だった。理由はない。たまたま落ちただけのことだが、木の実を踏んでい

て頭に落ちたのが面白い。そこから笑いが生まれた。笑いは人生を豊かにしてくれる原動力。「あれ？」と空を仰ぐ作者の苦笑が見えるようである。

舎弟てふ言葉なつかし秋彼岸 菅原 淑子

舎弟は弟さんのことか。すでに亡くなつていて今年も秋の彼岸を迎えた。ふつと口に吐いて出た「舎弟」という古い言葉に少し驚きながらも、その言葉から逆に弟さんの面影を懐かしく思った。悲しみは悲しみとして、それを越えた長い歳月が今の作者の支えとなつている。

蠅螂の明日の暮しはいかばかり 杉淵真喜子

今回、蠅螂が題詠だったのでそれに因む多くの句が寄せられた。多くは見立ての句で、蠅螂の姿形からの連想が多かった。この句は少し趣向を異にし「明日の暮しは」と、蠅螂の将来を心配する。心優しい作者に共鳴した。

試しにと植ゑし西瓜の甘きこと 鈴木 藤子

何の気なしに西瓜の苗を買い、植えた。初めての体験だったが、西瓜の生長は生活の楽しみの一つとなつたようである。そしていよいよ収穫。恐る恐る西瓜を切つて口にすると、豈囃らんや、甘いではないか。まことに、同慶の至りである。